

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

9

SEPTEMBER
2009

CONTENTS

オペラシアターこんにゃく座 オペラ〈変身〉……………	1~3
SELF PORTRAIT Duo La Bilancia、岡部昌子……………	3~4
最近の公演から・他……………	4~5
インフォメーション……………	6



写真上;オペラシアターこんにゃく座
オペラ〈変身〉
1998年俳優座劇場公演より(photo 岡原進)
写真左;林光

古都プラハの石畳の路地できこえたとびきりおかしな物語り歌

●9/15(火) オペラシアターこんにゃく座 オペラ〈変身〉

奇妙な冒頭で有名な、20世紀を代表する作家フランツ・カフカの小説『変身』。この作品を原作とした魅力的なオペラをACM劇場で上演いたします。

「ある朝、グレーゴル・ザムザが不安な夢から目を覚ましたところ、ベッドのなかで、自分が途方もない虫に変わっているのに気がついた。甲羅のように固い背中を下にして横になっていた。頭を少しもち上げてみると、こげ茶色をした丸い腹が見えた。アーチ式の段になっていて、その出っぱったところに、ずり落ちかけた毛布がひっかかっている。からだにくらべると、なんともかぼそい無数の脚が、目の前でワヤワヤと動いていた」(フランツ・カフカ、池内紀・訳『変身』白水社、2006年)。主人公は独身のセールスマン、両親と妹をひとりで養うためにくる日もくる日もせせと働いていましたが、そんな彼がいったい何故虫になったのかは一切説明されず、ひたすら両世界大戦間の都市プラハで生活する主人公とその家族の日常が書かれたこの作品には、現代にも通じる社会的状況や人間の心の動きが、冷静かつどこか可笑しさをもって描かれています。

これをオペラにして上演するのが、水戸芸術館に初登場の「オペラシアターこんにゃく座」。明瞭な日本語歌唱と演劇性を重視したそのユニークなオペラは、子どもから大人まで幅広い世代から支持されています。その芸術監督兼座付き作曲家を務めるのが、日本を代表する作曲家のひとり、林光です。林氏は水戸室内管弦楽団が委嘱した〈ヴィオラ協奏曲「悲歌」〉(1995年初演)の作曲家としても皆様におなじみかと思いますが、こん

にゃく座を中心に、〈セロ弾きのゴーシュ〉、〈森は生きている〉、〈吾輩は猫である〉など日本語によるオペラの創造にも大なる情熱を注いできました。

オペラ〈変身〉は1996年に本多劇場で初演され、また97年には第5回三菱信託音楽賞を受賞した作品で、今回は11名の歌役者と4名の楽士(ピアノ・ヴァイオリン・クラリネット・ファゴット)によって上演されます。Kと名乗る主人公が、とあるカフェで小説『変身』を朗読している場面がこのオペラの始まり。誰かがドアをノックする、その唐突な音を合図に、朗読を聞いていた者たちはカフカの作品の世界へと入っていきます。カフカの手紙や日記を引用し、歴史の趣を感じさせるプラハの街の様子を盛り込んだ山元清多による台本には、カフカが生きていた当時の雰囲気が見事に描かれています。またこのオペラでは、シーンごとに繰り出される緩急自在で多彩な歌と巧妙な演技によって、「変身」してしまった主人公に対する家族の受けとめ方の変化がより鮮やかに描き出されます。9月15日、こんにゃく座による新鮮な「物語り歌」の世界にぜひお越しください!

さて今回は、オペラ〈変身〉で主人公のKを務める大石哲史さんにインタビューをしました。こんにゃく座、林光という作曲家、そして本作品にかける熱い想いを語っていただきました。《高葉》

——まず大石さんがこんにゃく座に入ったきっかけをお聞かせ下さい。

もともと某団体がクラシックのオペラをやっていたのですが、オペラで日本語をやるとどうし

ても言葉がわかりづらくなるのが気になっていました。そんな時こんにゃく座という集団に出会い、日本語でちゃんとオペラをやっていると感じ、面白いと思ったんです。

——大石さんは約30年近くこんにゃく座で活動されていますが、こんにゃく座の魅力をあらためてお話しいただけますか?

やはり「言葉のわかるオペラ」をやっていることです。そこには音楽と同じくらい「芝居」という要素がからんでくる。作品の流れによって、芝居と音がどう融合するかが変わるんです。そこを波乗りするようにバランスをとって、どちらの世界とも関わりながら歌い演じるのが、やる側としてはとても楽しいですね。言葉と音の世界って、ときどき右脳と左脳で違うと言いますが、それを両方使うという、そこでのバトルが面白いという気がします。

——オペラ〈変身〉でも言葉とメロディの結びつきが生き生きとしていて、とても面白く感じました。

それはまず、訳詞による外国語のオペラ上演ではなく、もともと日本語の台本があって作曲を始めていますからね。それに林光の作曲には、日本語をどう生かすかに対して強い思いがあります。だからもし作曲家がかわったら、そううまくはいかないと思います。言葉における林さんの感性の鋭さが、作品に生かされていると思いますね。

——こんにゃく座の舞台は、「オペラ」と聞いておそらくイメージされるであろう舞台とは異なると思いますが、いかがでしょうか?

確かに最初は、日本で行われているオペラに対抗し、「日本語がわかって、かつもっとお芝居が楽



写真左：大石哲史

写真中・右；オペラシアターこんにゃく座 オペラ〈変身〉 1998年俳優座劇場公演より (photo 岡原 進)

しめるものを作りたい」というところから出発しましたし、今もその精神は続いています。いわゆる西洋オペラの世界とはもう離れてきていますから、比較に意味があるかどうかはわかりません。その辺りはお客様に決めていただくことですから。

その上であえて言うなら、外国語のオペラを見る際、言葉がわからなければ意味を想像しながら、音の良さだけに集中して聴く楽しみ方もあるでしょうし、僕なんかはそういうことが結構あるんです。でもこんにゃく座の場合は言葉と音と一緒に放たれ、流れてくるという面白さ、鋭さがある。でもそれって実は当たり前のことで、例えば「ずいずいずいころばし ごまみそずい」ってわらべ歌を歌う時、子どもは言葉かメロディのどちらかだけではなく一緒に覚えますよね。オペラでもそんなふうに、両方同時に聞こえてくると素敵だと思って。それは他のオペラとは随分違うでしょうね。もちろん日本にも「創作オペラ」というものがありますが、どちらかというはまだ西洋音楽の作りに偏った作曲が多いと思います。そうでない作曲家もいます。

林光という人には彼独特の音があるとも言えますが、まず言葉、日本語へのこだわりが強い。やる側もそれにそって、決して「美しい日本語」とは言いたくないのですが、今生きている普通の日本語をそのまま音にしたいと思うのです。それから「身体性」も、僕たちのオペラでは大きな特徴です。他のオペラ歌手が全然やらないような、かなりハードな訓練をしますから。

——ところで、カフカの『変身』を原作にしたオペラというのは珍しいと思うのですが、どうしてオペラにしようと思ったのでしょうか？

オペラ〈変身〉をやろうとした時、僕はまず原作を読んでみたのですが、読むのに苦労はしたものの小説として非常に面白かった。それにとっても社会性が強い作品で、後にアウシュビッツへ送られる事になった妹のことを暗示しているようにも読めますよね。一方で特に冒頭、虫になったところが非常に楽しい描写になっている。それで「これは当然芝居にしたいね」となり、台本作家の山元清多さんが林さんからオペラ化の話を受けて実現に至ったということです。日本では、舞台上そんな上演されていないかもしれませんね。

演出では、いかに虫を描写するかが問題でした。変なぬいぐるみを着たって仕方ないですからね(笑)。この小説を本にするとき、出版社が表紙に虫の絵をつけたいと申し出ると、カフカは絶対やめてくれと言ったそうです。想像の中で虫がいる方が怖いですし。僕らも具体的には虫を出したくないけれど、言葉だけではつまらないということで、みんなで考えた。なぜこの作品をやるのかについては、林さんの心ひとつだったと思いますが、いざやってみると相当難しかったけど、そのプロセスはとても面白かった。

この作品、テーマとしては非常に現代的ですね。ある人物が虫になり、家族と一緒に生きるときの、人間の心の動きが描かれています。そういう意味ではまさに今の時代に通じるテーマですよ、「引きこもり」そのものですから。「虫になった」ということは、要するにうちの中に入り込んで出ていけなくなったということ。鬱病を中心とした現代の最も大きい病巣に迫るようなことをカフカはあの時代にもう書いていたわけです。昔から日本にもあったとは思いますが、今まさにそういう時代じゃないですか。若い子が引きこもるとすごく似ている気がします。カフカ自身も性格的にはそういう面があったのではないのでしょうか。自分のこと、そして政治の問題を、作品の中で同時に転がっていて興味深いです。非常に現代的なテーマなので、おおいに今見ていただきたいなと思います。

——現代社会の問題につながっているのですね。

全くそうです。この物語では、ザムザは親父が投げた林檎が体に突き刺さり、それが致命傷になって死んでいきます。現代ではそういうことは少ないでしょうが、カフカ自身が父親に対して、逃げたいけど逃げられない、だけど逃げようとするっていう、対抗意識や確執も含めて典型的な親子関係だったのではないのでしょうか。林檎を投げるといふ行為自体は、別に親父じゃなくてもよかったでしょうし、それにこの作品で「虫になった」というのは方便だと思います。家族の誰かがそうやってうちの中から出なくなり、どうしても害を及ぼすようになると、家族はどうか。この作品では妹一人が兄さんを何とかしようとしていたけれど、結局その妹にもなじられる。愛情はあっても家族一人一人の関係がこみ合っく

る。重いテーマですが、当然起こりえることですし、さらに言えばそれが結局、家族内で殺傷事件が起きるなど、いろんな状況があるでしょう。まさに今につながってきますよね。50年前の日本では、そんな事件ほとんどありませんでしたから。カフカは、肉親とはどれほどの関係なのかということを感じていたんでしょうし、そう考えるととても大きいテーマですよ。

そんな中、林光は場面ごとに「フモレスケ」とか「スケルツォ」といった形を一つきめて音楽を作っています。このように少し重いテーマも音楽を伴うことで、楽しんだりあれこれ考えられるように気を配って作曲されています。そんなふうに、シーンごとにぱっぱっと音楽が変わる。それが魅力だと思います。

——〈変身〉における林光さんの歌の特徴をもう少し具体的に教えていただけますか？

こんにゃく座の古い作品を含め、光さんとはずっとお付き合いしていますが、本作品はひとつのターニングポイントだと思います。林さんは、こんにゃく座の作品としては最初民話から入って、突然ブレヒトの作品を原作とした『白墨の輪』にうつる。その頃まではいわゆる不協和音はさほどなく、聞きやすかった。それが〈変身〉あたりから、楽しい音楽の中でも音のぶつかりがかなり増えたと感じています。それが意図的なのかどうかはわかりませんが、単純にいうと音をとるのがとても難しい。それをどれだけやる方が楽しんで出せるかなと思うけど、歌い手としては何ヶ所が困難きまるところがある。初演の時は苦勞しましたし、今回も苦勞するでしょう(笑)。でもそれがはまると面白い音になる。ずれるとだめなんです。そんなふうに、林光のオペラの作曲が少し変わったというターニングポイントになる作品だと思います。人によっては音が少し難しいと感じるかもしれませんが、そういう音だから面白いんだっていうのを稽古してお聞かせしていきたいなと思います。

——「虫」を演じる面白さ、難しさはどんなところにありますか？

ときどき虫の体の一部、例えば「これ虫の頭の位置だろうな」というところに僕はいますが、難しいのは、その中でクールでいなければならぬこと。このオペラは「その役になりきる」という



Duo La Bilancia
(左から;長澤 順、清水美和)

作品ではない。読書会から始まるオペラなので概ね語り手ですが、時々役に入るので、ドラマに入りこんでも、ふと頭の中では「今このKは何を感じているんだろう」、「どんな顔をしていけばいいのか」というところにまた戻る必要がある。そこが難しくも楽しくもあります。それからしんどいのは、ずっと舞台に出ているので集中力を切らせられないところですね。肉体的には、稽古によっていくらぜいぜいしても歌える体は何とか作れるんです。そのためにダイエットしていますから。目標あと3キロ(笑)。テーブルからぶら下がって歌ったりするので、重いと動きが落ちるんです。

——では一番難しいのは意識の持ち方なんですね。

ええ。この物語はKの独白が基本だということを前提にお客様に見ていただきたいです。小説やお話を書く時って、多角的な目から書いてもいいわけですが、僕は、この小説はいわゆる私小

説で、カフカが自分の目から見た家族劇なんだろうなど演じながら思ったことがあるんです。作品のおわりの方、ザムザは、これでしかなかったと、一種の自殺願望に近い言葉とともに死を迎えている。一方家族はほっとして、さあピクニックに出かけようと、まるで喜んでいてみたいにそこにいる。そんなところが面白いです。そうして最後はアウシュビッツに向かうことを暗示するような言葉と音楽になるのですが、とにかく作品を通じて、父親は林檎を投げた、妹はこうしたというように、「私」、つまり虫の目からみて書かれていて、それは意外とポイントだと思います。

——その他注目して観てほしいところはありますか？

今私が面白いと思うのは、四人の優秀な楽士たちです。小編成なので、一対一での言葉と音のからみがある。そうした真剣勝負みたいなのがたくさんあるので、やりながらぞくぞくドキド

キするんです。「楽士も一人の出演者として何か信号を発している、ひとつの言葉を持って発している」というふうに見ていただけるようなパフォーマンスでありたいと思っています。特にヴァイオリンが活躍しますよ。これは音楽、それとも芝居？楽士は演奏者、それとも役者？と思わせるようなからみが楽しいですね。

——最後に、水戸の聴衆に向けてメッセージをどうぞ。

テーマうんぬんよりも、まずは言葉と音、特にいろんな楽器の音や役者の肉体が、わっとぶつかりあって、火花を散らしながら何かを作っているところをぜひ楽しんでいただきたいと思います。

——どうもありがとうございます。

(2009年7月13日 オペラシアターこんにゃく座 事務所にて) 【高巣】

SELF

PORTRAIT

茨城出身の若手ピアニスト2人が繰り広げる、息の合ったピアノ・デュオ

■9/6(日) Duo La Bilancia (長澤 順、清水美和) ピアノ・デュオ・リサイタル

「Duo La Bilanciaってどんな意味ですか?」と、よく聞かれます。答えは、イタリア語で「天秤」です。思い起こせば3年前、高校の同窓生である私たちが、久しぶりに芸術館の楽屋で再会し、今度2台ピアノをやってみない?という感じで、なんとなく始まったのが、デュオ結成のきっかけでした。その時は、名前など全く考えておらず、ましてや数年後に、デュオ・リサイタルを開催することになるなど、夢にも思っていません

でした。翌年、水戸芸術館の「茨城の名手・名歌手たち」に出演させていただく事になって初めて、名前が必要となり、中身も外見も違わず2人なので、せめて音楽くらいはバランスを取りたい、という思いから「天秤」と名づけることになったのです。

私たちは、あっという間にデュオの魅力に取り憑かれてしまいました。その面白さは、なんと言っても「掛け合い」にあると思います。掛け合い、すなわち会話です。デュオの曲を弾いていると、本当に会話をしているような錯覚に囚われる瞬間があります。昔からおしゃべりばかりしてきた私たちですが、今はピアノという楽器を通して相手に感情や言葉が伝わるようになり、たまに、今まで気づかなかった相手の一面を発見してびっくり!くらくら!することも珍しくありません。

2台ピアノの演奏会はあまり頻繁には開かれませんが、作品は意外に多く、様々な時代の作曲家が曲を残しています。今回の演奏曲目は、それぞれ時代も性格も異なる曲を選びました。幕

開けは、モーツァルトのソナタです。ドラマ「のだめカンタービレ」でも取り上げられ、古典派の数少ないデュオ曲の中でも、洗練された傑作とも言える作品です。シャブリエのワルツは、フランス人らしい洒落っ気がたっぷり。一転、ラヴェルは色彩豊かなハーモニーと民族舞踏のリズムで、スペインの熱い風を巻き起こします。後半は、パーカッションの中村文彦氏をお迎えし、喜劇と悲劇が絶妙に絡み合う、デュカスの交響詩で始まります。魔法使いの弟子が、魔法を使うことに失敗して家の中は水浸し!さあ、この結末はいかに!そして最後は、個性あふれる絵画のイメージを鏤めたムソルグスキーの名曲〈展覧会の絵〉で締めくくります。

私たちが舞台上で繰り広げる滑稽なやりとりや小競り合いを、心ゆくまでお楽しみください。音楽会話が作り出す世界を覗かれた皆様と、心が通い合う瞬間を生み出すことができたなら、こんなに幸せなことはありません。

長澤 順・清水美和



岡部昌子

岡部昌子のピアノが、色彩と香り
にみちたフランス的世界へと誘
います。

■9/27(日) 岡部昌子 ピアノ・リサイタル

水戸芸術館でリサイタルをさせて頂くのは、今
回で2度目になります。そして、1回目と同じく、
フランス音楽を中心としたプログラム(フォー
レ:主題と変奏、ショパン:スケルツォ第4番、ド
ビュッシー:前奏曲集第1巻)と致しました。

私のフランス音楽との出会いはと言えば、大
学時代、お世話になった安川加寿子先生から、よ

く「フランスものはどう…」と勧められ、勉強し
た事だったと思います。当時の私は、シューマン
やショパンなどロマン派の音楽にあこがれてい
て、ドビュッシーやラヴェルを勧められると、そ
れまで勉強した事もなかったし、音もなじみが
なく、少し抵抗がありました。しかし、とにかく
そういう機会に恵まれ、弾いていくうちに、その
繊細で何とも言えぬ美しさに惹かれ、次第に親
しみを持つようになりました。結局、大学卒業
後も、フランス音楽が学べるようにと、パリで勉
強する事になりました。

今回のプログラムに取り上げましたフランス
の代表的な作曲家ドビュッシーは、19~20世紀
パリで活躍しました。より自由な音楽を求めて、
従来の和声法にかわり、全音音階などを用いて、
新しい独自の世界を創り出しました。その後の
パリでは、絵画の世界でもピカソやブラックな

ど、キュビズムの画家達が現れ、抽象の世界へと
…20世紀へ時代が流れて行きます。そんな文
化の遺産が、パリには今でも沢山残っているの
です。そして、ドビュッシーに先立ち、やはりフラ
ンスの作曲家フォーレ。その作風は、気品があり、
何ともフランス的な、洗練された美しさに満ち
ています。そして、さらに時代をさかのぼり、19
世紀半ば、フランスとは大変縁の深かったショパ
ン。ポーランドに生まれながら、その半生をパリ
で過ごしたショパンは、パリの社交界で賞賛され
つつ、数々の名曲を残しました。

そんな作曲家達の残したすばらしい作品を集
めました。その作品の美しさと奥深さを少しで
もお伝えできればと思います。皆様、お時間が
ありましたら、どうぞ聴きにいらして下さい。

岡部昌子

最近の公演から

MAY
JUNE



1



2



3

MCOアカデミー[講師:アミーチ・クアルテッ ト] 公開レッスン&演奏会 (4月30日,5月3日~7日)

将来、水戸室内管弦楽団(MCO)のメンバ
ーとなって活躍してもらえる人材を育成しよう
という目標の下に実施する教育プロジェクト
が、MCOアカデミーだ。講師は、水戸室内管弦
楽団のメンバーでもある川崎洋介(ヴァイオリ
ン)と原田禎夫(チェロ)、そして元イムジ合奏
団のリーダーを務めたフェデリコ・アゴスティー
ニ(ヴァイオリン)、ドイツ・トロッシンゲン音楽大
学教授のジェームズ・クライツ(ヴィオラ)の4人か
ら成るアミーチ・クアルテットが務めた。本セミ
ナーは「ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏プロジェ
クト」というテーマを掲げ、今回はその第1回目
であった。80曲を超えるハイドンの弦楽四重奏
曲は、室内楽を学ぶ若い演奏家たちにとって、必
須の作品群である。今回のセミナーには、MCO
のエキストラとしても度々出演している井上静
香(ヴァイオリン)や熊澤雅樹(チェロ)をはじめ
とする12名が参加した。セミナーは受講生のア
ンサンブルにアミーチのメンバーがそれぞれ一人

ずつ入る形で実施された。6日間のレッスンを
経て5月7日に公開発表演奏会が行われた。また、
セミナーに先立って4月30日にはアミーチ・ク
アルテットによる演奏会を行った。さらに5月3日
から6日の期間は、舞台上のレッスンを公開して、
一般の方々にも聴講していただいた。《中村》

ピョートル・アンデルシェフスキ ピアノ・リサイタル(5月31日)

時代が進むにつれ、クラシックの演奏家の中
にもビジネスマン顔負けのしっかり者が増えてき
ている気がする。しかし、5月末の日曜日、水戸
に姿をあらわしたピョートル・アンデルシェフス
キは、近頃めずらしいくらい純で、不器用で、「天
然」なピアニストだった。人の話を聞いていな
かったり、楽屋にトイレがあるのにわざわざ遠
いトイレに向かったり、「心ここにあらず」の時
のアンデルシェフスキは「あやしい人」に間違
われそうだった。さらに担当者を不安にさせた
のは、シューマン〈暁の歌〉のリハーサルでのこと。
これは来日直前に決まった曲目であったが、技

1~2.MCOアカデミー 公開レッスン&演奏会
3.ピョートル・アンデルシェフスキ ピアノ・リサイタル



1



2



3



4

術的には初心者でも弾けそうな曲なのに、まったく指がまわっていない!これには驚いた。精神的に曲と完全に同化していないと弾けなくなってしまうらしい。アンデルシェフスキにあっては、テクニックで表面を取り繕うことなどもののほかなのである。さて、本番では、担当者の不安も杞憂に終わり、アンデルシェフスキは並はずれた集中力でシューマン、バッハ、ヤナーチェク、ベートーヴェンの4曲を弾き切った。特に後半は、息をのむ瞬間の連続だったと思う。アンコールは、バルトーク〈チーク地方の3つのハンガリー民謡〉。《関根》

アンケートから●とても個性的な演奏で、とてもすばらしくて…感動しました。どの音もしっかりと響いていて…本当にブラボーでした。(日立市:F.A.さん)●人馬一体という言葉があるけれど、“人ピアノ一体”というがごとき態度で曲を進めているかのように思われた。(石岡市:N.I.さん)●ベートーヴェンの〈ピアノ・ソナタ第31番〉が素晴らしかったです。特に、フーガの部分、2度目のテーマは、天上から光がさしてくるような響きで、心打たれました。(水戸市:K.G.さん)

1~2.ピョートル・アンデルシェフスキ ピアノ・リサイタル
3~4.「茨城の名手・名歌手たち 第20回」出演者オーディション

「茨城の名手・名歌手たち 第20回」 出演者オーディション(6月7日)

10月17日に開催する本演奏会に先立ち、出演者オーディションを行いました。厳正な審査の結果、7名と1組が合格し、本演奏会への出演を決めました。10月の演奏会をどうぞお楽しみに!《関根》

【オーディション実施概要】

◎応募総数 35(管楽器 12/打楽器 なし/声楽 20/器楽アンサンブル 3)

◎合格者(受験番号順)

辺保陽一(リコーダー)、不二原輝子(フルート)、坂口大介(サクソフォン)、野田秀一郎(トロンボーン)、山崎法子(ソプラノ)、宇佐美悠里(ソプラノ)、西晴美(メゾ・ソプラノ)、Duo Reflet(2台ピアノ)

◎審査委員(敬称略・五十音順)

池辺晋一郎、梶原征剛、片岡啓子、小泉恵子、猶井正幸、畑中良輔(審査委員長)、三善清達

若杉 弘氏を悼む

水戸芸術館音楽部門の企画運営委員、企画運営顧問を務めた指揮者の若杉 弘氏が7月21日、東京にて74歳で逝去されました。氏はドイツを中心に活躍し、その手腕を発揮されました。ケルン放送交響楽団首席指揮者、デュッセルドルフのライン・ドイツ・オペラ音楽総監督、ドレスデン国立歌劇場常任指揮者、バイエルン国立歌劇場指揮者、チューリヒ・トーンハレ協会芸術総監督・同管弦楽団首席指揮者を歴任、日本では、NHK交響楽団の正指揮者を務め、新国立劇場オペラ芸術監督としても活動をされていました。

水戸芸術館音楽部門では、開館の1990年から2005年3月まで企画運営委員、同年4月から2007年3月までは企画運営顧問を務められました。若杉氏は文学や演劇などにも造詣が深く、わたしたちは、その洞察力の鋭さ、そして情熱的に音楽に打ち込まれる姿に接する機会に恵まれ、本当に多くのことを学びました。氏が水戸の聴衆のために企画された演奏会は、いつも、香り立つ叙情性と真理を探究する哲学的な精神とが同居するものでした。また、水戸室内管弦楽団の演奏会では、4回の定期演奏会と1回の館外公演を指揮されました。聴衆を陶醉させるその甘美で歌うような音楽表現を水戸室内管弦楽団に注ぎ込もうと努力した氏の姿が、思い出に残っています。

水戸芸術館音楽部門への多大なご尽力に感謝し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

若杉 弘氏が企画した演奏会

「ストラヴィンスキー:兵士の物語」(1990年)、「メシアンの肖像」(93年)、「小さな聴き手のためのコンサート4」(94年)、「アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽帳」(99年)、「中田喜直 合唱の午後」(2001年)、「東京オペラグループ公演 喜歌劇〈奥様女中〉」(04年)、「室内オペラ ふたつの電話」(05年)、「びわ湖ホール声楽アンサンブル」(06年)

若杉 弘氏が指揮をした水戸室内管弦楽団の演奏会

●第3回定期演奏会(1990年11月)

J.S. バッハ(モーツァルト)編曲:

〈平均律クラヴィア曲集〉から 四声のフーガ
K.405-1, 5, 2

J.S. バッハ:

管弦楽組曲 第2番 口短調 BWV1067

J.S. バッハ(モーツァルト)編曲:

〈平均律クラヴィア曲集〉から 四声のフーガ
ケッヘル番号無し(ハ短調), K.405-4, 3

モーツァルト:ディヴェルティメント 変口長調 K.287

●第26回定期演奏会(96年6月)

R. シュトラウス: 町人貴族

R. シュトラウス: オペラ〈ナクソス島のアリアドネ〉

●第30回定期演奏会(97年6月)

J.C. バッハ:

2つのオーケストラのためのシンフォニア
変ホ長調 作品18の1

マルタン: 小協奏交響曲

ラヴェル(ロザンタール編曲): 博物誌(管弦楽伴奏版)

コントラルト: ナタリー・シュトゥッツマン

ラヴェル: 高雅にして感傷的なワルツ

●第52回定期演奏会&福岡公演(2002年11月)

ヴァーグナー: ジークフリート牧歌

ヴァーグナー(ハンツェ編曲):

ヴェーゼンドンク歌曲集(管弦楽版)

コントラルト: ナタリー・シュトゥッツマン

ベートーヴェン: 交響曲 第1番 変ホ長調 作品21



水戸室内管弦楽団 第52回定期演奏会(2002年11月)より

information

- チケットに関するお問い合わせ
…水戸芸術館チケット予約センター/029-231-8000
営業時間/9:30～18:00(月曜休館)
- 公演内容や企画に関するお問い合わせ
…水戸芸術館音楽部門/029-227-8118
- 【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

チケット・インフォメーション

〈7月31日(金)発売分〉

- ◎ 茨城の名手・名歌手たち 第20回
10/17(土)18:00開演 料金(全席自由): ¥1,500
- ◎ 市毛恵子 ピアノ・リサイタル
11/1(日)14:30開演
料金(全席自由): 一般¥2,500 学生(大学生以下)¥1,500

〈8月29日(土)発売分〉

- ◎ 佐藤 篤 ピアノ・リサイタル
11/3(火・祝)15:00開演 料金(全席自由): ¥3,500
- ◎ 水戸バッハ・コレギウム 第20回定期演奏会
11/8(日)14:00開演 料金(全席自由): ¥1,500

〈8月30日(日)発売分〉

- ◎ 水戸室内管弦楽団第78回定期演奏会
11/25(水)18:30開演、11/26(木)18:30開演、11/27(金)18:30開演
料金(全席指定): S席¥13,000 A席¥11,000 B席¥8,000

※発売初日に芸術館でお求めになれるチケットは、水戸室内管弦楽団第78回定期演奏会では、お1人様1回につき2枚までとさせていただきます。

※水戸室内管弦楽団第78回定期演奏会には、8月26日(水)より運営維持会員、8月27日(木)より友の会会員の先行電話予約がありますので、8月30日(日)の一般発売の時点で、券種によってはお客様のご希望に添えない場合があります。予めご了承ください。

これからの演奏会・残席情報

○…残席あり(20席以上) △…残席わずか(20席未満) ×…残席なし
中央…中央ブロック 左右・裏…左右ブロックおよびステージ裏 補助…補助席

- ◎ Duo La Bilancia(長澤 順、清水美和)
ピアノ・デュオ・リサイタル ……9/6(日)自由席○
- ◎ オペラシアター こんにゃく座
オペラ(変身) ……9/15(火)1F○、2F○、3F○
- ◎ 岡部昌子 ピアノ・リサイタル ……9/27(日)自由席○
- ◎ 水戸室内管弦楽団第77回定期演奏会 ……10/10(土)中央×、左右・裏△
10/11(日)中央×、左右・裏△
- ◎ 〈ちょっとお昼にクラシック EXTRA2〉
オルガニスト・グループ「TRM」の「踊るオルガン」…10/26(月)1F△

※7/29(水)現在の状況です。

※公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問合せ下さい。

※固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な9月のスケジュール

コンサートホールATM

- Duo La Bilancia(長澤 順、清水美和) ピアノ・デュオ・リサイタル
9/15(火)18:30開演 料金(全席自由): 一般¥2,500 学生¥1,500
- 岡部昌子 ピアノ・リサイタル
9/27(日)15:00開演 料金(全席自由): 一般¥2,500 学生¥1,500

エントランスホール

- パイプオルガン プロムナード・コンサート
9月:5日(土)、13日(日)、19日(土)、26日(土)
開演時間:12:00/13:30(2回公演) 入場無料 ※演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

- 水戸芸術館開館20周年・水戸市市制施行120周年・水戸藩開藩400年記念事業
〈リージョナル・シアター+水戸市市民演劇学校公演〉『マキコマレーノ!!』
9/4(金)19:00開演 9/5(土)19:00開演 9/6(日)14:00開演
料金(全席指定): ¥1,500

■ オペラシアター こんにゃく座 オペラ(変身)

9/15(火)18:30開演
料金(全席指定): A席¥3,000 B席¥2,000

■ 第13回水戸短編映像祭

- 9/20(日) A「Audio Visual Shockers !!!!!!!」 12:00～
上映+ミニライブ+トーク
ゲスト:UKAWANIMATION!、高木正勝
B「バンドラの匣」プレミア上映 18:30～
ゲスト:富永昌敬
- 9/21(月・祝) C「ドラマなTV-CM～JRA『CLUB KEIBA』の全貌～」13:00～
ドラマ仕立てのテレビ・コマーシャル「CLUB KEIBA」シリーズを全作上映
D「つみきのいえ」とアニメーションスタジオCAGEの世界
14:50～ ゲスト:野村辰寿、稲葉卓也、加藤久仁生(アニメーション作家)
E「守護天使」16:40～
料金(全席自由): A:¥3,500 B～E:¥1,000
- 9/22(火・祝) コンペティション部門
ノミネート作品上映&審査結果発表・授賞式
12:00～ 料金(全席自由): ¥1,200

※お問い合わせ: NPO法人シネマパンチ TEL.029(253)5783
ホームページ <http://www.cinemapunch.com>

現代美術センター

■ 現代美術も楽勝よ。

8/29(土)～10/12(月・祝) 9:30～18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日 ただし9月21日、10月12日(月・祝)は開館

料金: 一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料

茨城の主な9月の演奏会 ※有料公演のみ

◆ 佐川文庫 TEL/029(309)5020

■ 若手ピアニストシリーズ ―若きピアニストたち―
中林理カ ピアノ・リサイタル 9/12(土) 18:00開演

◆ 常陽藝文ホール TEL/029(231)6611

■ 藝文友の会会員優待催事
ジャズコンサート クリヤ・マコト・トリオ 9/12(土) 17:00開演

◆ 茨城県立県民文化センター TEL/029(241)1166

■ 錦織 健コンサート 9/27(日) 15:00開演

◆ 水戸市民会館 TEL/029(224)7521

■ 県民による県民のための茨城県ハーモニカチャリティコンサート2009
9/12(土) 13:00開演

◆ 日立シビックセンター音楽ホール TEL/0294(24)7720

■ 仲道郁代 オール・ショパンのタバ 9/18(金) 18:30開演

◆ ギター文化館 TEL/0299(46)2457

■ 村治奏一 ギターリサイタル 9/6(日) 15:00開演
■ ラファエラ・スミッツ ギターリサイタル 9/20(日) 15:00開演

◆ ノバホール TEL/029(852)5881

■ 東京藝術大学音楽学部同声会茨城支部コンサート in つくば
9/26(土) 18:00開演
※お問い合わせ: 榊原 TEL.029(852)6905
■ つくばふれあいコンサート ロバの音楽座「ジグの空想音楽会」
9/27(日) 15:00開演

◆ 鹿嶋勤労文化会館ホール TEL/0299(83)5911

■ 東儀秀樹全国ツアー-2009 9/18(金) 18:30開演

◆ 坂東市民音楽ホール ベルフォーレ TEL/0297(36)1100

■ KOBUDO ―古武道― ～尺八・チェロ・ピアノコンサート～「時ノ翼」
9/21(月・祝) 16:00開演

水戸芸術館音楽紙【ヴィーヴォ】 2009年8月発行 第143号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL: 029-227-8118 FAX: 029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順): 佐川真美 高巢真樹 関根哲也 中村晃

[お知らせ] スタッフの中崎美智代が8月をもって退職いたしました。9年間の在職期間、皆様ありがとうございました。

DTP/村田征司[株式会社イセブ]
印刷所/株式会社あけぼの印刷社

次号は…
指揮者なしのMCO。秋の収穫祭!